



「戦時下の川越」展示室内

戦時下の川越展

川越市は、戦時中幸いにも大きな空襲もなく終戦を迎えましたが、市民の生活は物資不足の中で多くの制約を受け、子供たちも銃後を守る一員として大きな犠牲を強いられました。

本展は、戦後50年という節目の年にあたり、過去の戦争の悲惨さと今日の平和の尊さをあらためて問いなおす良い機会として開催されました。展示資料は主として、戦時体制下の市民生活の様子を伝えるもの、頻繁に行われた防空演習に関する

もの、工場などへの学徒動員の様子を伝えるもの、学校での子供たちの生活を伝えるものなどを中心に244点を公開いたしました。資料の収集にあたって多くの市民の方々にご協力をいただき厚くお礼申し上げます。

本展は、平成7年7月29日(土)から9月17日(日)までの43日間開催し、17,739人の方々に入館いただきました。

学校の行事に見る 子供たちの生活

～戦時下の川越より～

「戦時下の川越」では、主として戦時体制下の市民生活の様子、防空演習や工場等への学徒動員、学校や家庭での子供たちの生活等を紹介いたしました。

ここでは、もう一度子供たちの戦時下の生活、特に学校での生活に視点をあてて述べてみたいと思います。

まず、昭和16～19年度にかけての学校日誌（現第一小学校、大東西小学校）の中から、学校の主な行事を拾いだしてみることにしましょう。

- ・ 神社参拝
- ・ 報国農場麦刈り
- ・ 学童すもう大会
- ・ 体育錬成大会
- ・ 大掃除
- ・ 教錬
- ・ 奉安殿清掃
- ・ 模型滑空機大会
- ・ 防空演習
- ・ 貯金日
- ・ 創意工夫展
- ・ 食事訓練
など
- ・ 団栗集め
- ・ 寒稽古
- ・ 砂運び
- ・ 鍛練遠足
- ・ 勤労奉仕
- ・ 松根油採集
- ・ 英霊凱旋
- ・ 研究授業
- ・ 防空壕掘り
- ・ 大詔奉戴日
- ・ 衛生検査
- ・ 食料増産協力

これらの行事をたどってみると、戦時色の濃い学校行事が伺われます。銃後の守りとして、兵士



体育錬成大会での相撲（現福原小学校）

への準備として、そして軍への協力としての活動が展開されていたことがわかります。

さらに、勤労奉仕・作業という点に着目してみますと、興味深いことが見えてきます。

大東村西国民学校では、子供たちは学校生活の大半を勤労奉仕や作業で費やしていたようです。それは夏休みにも及んだり、多い時には月に23日間にも及んだりすることもあったようです。

大東村西国民学校（昭和19年度）

月	主な勤労奉仕、作業内容	日数
4月	砂運び、神社清掃等	3
5月	茶摘、大豆の種子集め、桑皮むき、草刈り等	10
6月	落ち穂拾い、甘藷苗つけ、草刈り、小麦脱穀、茶摘、桑皮むき等	15
7月	茶摘、田植え、小麦の乾燥、じゃが芋掘り、除草等	15
8月	校内実習地除草、里芋除草、水田除草、報国農場整備等	9
9月	草刈り、神社清掃等	8
10月	大掃除、稲刈、堆肥整理、稲運び、麦田整理、草むしり等	8
11月	麦田整地、堆肥入れ、麦播き、甘藷整理、家庭作業、団栗拾い等	23
12月	神社清掃、団栗拾い、落葉集め、円錐壕掘り、校内清掃等	10
1月	砂運び、麦踏み、運動場整備、高畦作業等	8
2月	神社清掃、大掃除、茶摘など	6
3月	神社清掃、馬鈴薯苗つけ、開墾作業、高畦作業など	8

中でも、食料増産活動はNHKの学校放送で取り上げられ、3年生以上高等科2年生までの児童370人が田畑を耕し、米35俵の供出やすき、くわを持って一生懸命に働く姿などが実況されたほどでした。

大東西小学校開校百年記念誌には、『・・・略・・・学校で勉強には重きをおかず、毎日が勤労奉仕でした。養蚕の時期になると、毎日ほとんど桑の皮

むきの割り当てで、きょうは誰と誰はこの家へと5、6名ずつ皮むきに出向いていったのです。『略』(貫井清子談)の記述もあり、まさに勤労奉仕、作業に明け暮れた学校生活だったといえます。

一方、第一国民学校では、大東村西国民学校と比べると、勤労奉仕、作業に費やした日数は、それほど多くはありません。

第一国民学校(昭和19年度)

月	主な勤労奉仕、作業内容	日数
4月	清掃	1
5月	清掃	1
6月	奉安所清掃 堆肥用草刈り	2
7月	大掃除	1
8月	乾草集め	1
9月	大掃除	1
10月		0
11月	灰集め、奉安所清掃、落ち穂拾い	3
12月	落ち穂拾い、団栗拾い、大掃除、もみすり、ヒマの皮集め等	8
1月	団栗運搬	2
2月	奉安所清掃	1
3月	薪づくり、清掃	2

その代わりに、防空演習、鍛錬行軍、体錬科の視察授業等の記述が学校日誌の中に多くみることができます。

さらに資料を集めてみないと正確なところは言えませんが、田畑の広がる地域においては、食料増産的な活動が多く、そうでない地域においては闘魂錬磨と結びついた活動が各学校で展開されていたのではないのでしょうか。



大掃除の様子(現川越小学校)

鉢巻きをし、上半身裸での掃除。「ここががまんた戦地を思へ」の掲示が見える。

資料調査でたまたまお邪魔したお宅で、当時の国民学校での学校生活の様子を伺う機会が幾度かありました。

朝から晩まで松の根を探し集め、校庭に山盛りになるほど集めたという話。

相撲取がきて、体育の時間に指導してくれたという話。

校庭に、空襲に備えて「タコ壺」と呼ばれる一人が入れる穴を掘ったという話。

履くものがなく、裸足で登下。防空頭巾はいつも携え、防空演習では頭巾で両耳を押さえ、地面に何度も伏せる練習をした話。

このような話を伺う中で、当時の学校日誌に残された記録の一つ一つに、戦時下を懸命に生きぬいてきた子供たちの姿が重なってきます。

命の尊さと平和であることの大切さを社会の変化の激しい現在においてこそ、決して忘れてはならないものであることを痛感して、筆をおくことにします。

(注)表は大東村西国民学校日誌、第一国民学校日誌の記述をもとに作成したもの

(教育普及係 平岡 健)

15年戦争末期の貨幣

◆はじめに

当館では平成7年7月29日から9月17日まで「戦時下の川越」展を開催し、多くの方々にご覧いただきました。

ここでは、人々の生活に欠かせなかった「小銭」について紹介します。

今回展示したのは太平洋戦争中に使われたアルミニウム貨と錫合金貨、小額の政府紙幣と日本銀行券です。これらのお金にはなじみ深い方も大勢いらっしゃると思います。またこのお金を見て、どうにもおもちゃみたいだと思の方も大勢いらっしゃることでしょう。これらのお金がどういった歴史背景で登場したのかお話ししたいと思います。

◆戦時体制へ

日本は昭和6年(1931)の柳条湖事件から急速に戦時体制に入っていきます。このころからお金も戦争と密接に関わってくるようになります。

昭和12年(1937)、日中戦争が始まるとそれまで発行されていた貨幣は銃身や砲弾に転用されるため製造が中止されます。昭和13年(1938)6月には臨時通貨法が公布されて通貨の材質、品位の変更が勅令で可能となり、軍需材料への転用が容易になりました。ここでアルミニウム青銅貨(10銭・5銭)、黄銅貨(1銭)と50銭の政府紙幣が発行

されることになりました。

この50銭紙幣は富士山と桜の図で発行当初はめずらしく、子供同士で硬貨と交換したこともあったそうです。しかし、すぐに大量に出回るようになり、めずらしくもなくなりました。

この札は昭和17年(1942)、図が靖国神社に変わり、大量に流通します(写真3上)。

◆金属回収とアルミ貨幣

中国での戦局が拡大するにつれて日本は物資不足に悩むようになります。

昭和15年(1940)、銅の不足が著しくなると、すでにアルミ製となっていた1銭と同様に10銭・5銭も純アルミ貨にかわりました。

また金属製日用品が回収されるようになります。昭和16年(1941)、国家総動員法に基づく金属回収令、翌年の強制譲渡命令により町内会、隣組を通じてなべ、釜等が強制的に回収されました。

そして金属回収はお金にも及びます。アルミ貨(写真2左)以外の硬貨であれば江戸時代の古銭や外国のコインまで回収の対象とされました。

当時、硬貨を50枚引換える毎に手数料が5銭交付されました(写真1)。しかし日用品の回収が強制的だったのと比べると硬貨の回収はそれほど行われず、様々な種類の硬貨が並行して使われて



写真1 硬貨引換えチラシ(昭和17年)



写真2 アルミ貨幣(左) 錫合金貨幣(右)

いました。

◆アルミ不足と錫合金貨幣の登場

太平洋戦争のために航空機が増産され、大量のアルミニウムが必要になると、アルミ貨は昭和16年、18年の二度にわたり軽量化されます。1銭は二度目の変更で重さ0.55gになりました。今の1円玉は1gですから約半分の重さです。お賽銭でもひらひらと落ちて頼りなかったとか、「水に浮くお金」などと言われて評判はよくなかったようです。

しかし航空機の原料不足がすすむと、このアルミ貨も製造が中止されました。

昭和19年(1944)3月、かわりに錫亜鉛合金の貨幣が発行されます(写真2右)。錫は日本が占領していた東南アジアから産出しましたが、軟らかく、磨耗しやすいため通貨の素材には適していませんでした。しかも材料節約のため大きさは今の1円より小さいものでした。

戦局が悪化して南方の制海権の維持が困難になると錫の輸送は滞るようになりました。そして昭和19年(1944)8月、発行開始から5ヵ月で10銭・5銭の錫合金貨は製造中止となりました。

◆金属から紙へ

そして10月には10銭・5銭の日本銀行券が発行されます。本来小額紙幣は硬貨の不足を補うため政府が発行します。しかし当時「政府紙幣」を発行するための法律改正の余裕がなかったので大蔵大臣告示で発行できる「日本銀行券」となったのでした。

図柄は「大東亜共栄圏」の思想をあらわす「八紘一字」の塔(10銭)、天皇制擁護のシンボル「楠木正成」の銅像(5銭)と国民の戦意高揚を期待したものでした(写真3中・下)。

このお札は公衆電話や自動販売機に使用できず、またかさばるので財布がふくらんで困ったといえます。

さらに終戦を目前にした昭和20年(1945)には陶製貨幣が京都、瀬戸、有田の各所で製造されましたが敗戦のため発行には至りませんでした。

◆おわりに



写真3 50銭政府紙幣(上)
10銭・5銭日本銀行券(中・下)

明治・大正時代の貨幣は江戸時代から受け継がれた彫金の技術・デザインが材質の光沢とあいまって美しいものでした。それが軍国的色合いがデザインに露骨にあらわれるようになり、さらには素材さえも節約され通貨としては欠点の多いお金が生まれました。

日本の金属資源は非常に乏しく、家庭で実際に使われていた日用品や経済の基盤ともいべきお金の材料までつぎ込まなければ戦争の継続はできなかったのです。

(主な参考文献)

『図録日本の貨幣9 管理通貨制度下の通貨』日本銀行調査局編

『近代通貨ハンドブック日本のお金』松尾良彦監修

(学芸係 荻野将盛)

尋常高等小学校の「郷土誌」編纂について

1、はじめに

各地の尋常高等小学校では、明治末年から大正初年にかけて郷土の地誌である「郷土誌」の編纂を手掛けています。尋常高等小学校で作られた「郷土誌」は、その編纂の状況やどの位の規模で作成されたかなど、その実態が十分明らかになっていません。ところが最近の自治体史編纂の過程でそうした資料が徐々に紹介されるようになりました。それらの成果を受けて入間郡内の「郷土誌」をまとめたものが表1です。これは、今年の第8回企画展「川越学事始め—郷土史の系譜を追う—」の準備の過程で作成したものです。一覧表の作成にあたっては時間的な制約もあり、所在確認を文献を中心に行っています。また原資料を直接調査していないなどの限界もありますが、今後の調査の進展を期して、この表を使って若干の考察を試みることにします。

2、「郷土誌」と「郷土調査」

それでは表1の一覧表からどのようなことが指摘できるでしょうか。編纂物の書名を比較してみると、先ず明治42年頃から大正9年頃までに編纂されたものは「郷土誌」という名称を用いていることが分かります。書式は半紙判あるいは美濃判に墨書したものが一般的だったようです。一方、昭和4年頃から8年頃に編纂されたものはその多くが「郷土調査」という名称を用いています。書式も孔版印刷が中心だったようです。こうした書名と作成年代の違いは、当然編纂の背景と編纂内容の相違に結び付いてくると思いますが、編纂の背景を考える前提として調査項目の内容を検討してみることにします。

川越市内で実見できたいくつかの編纂物からその目次を書き出したのが表2です。①②③はそれぞれ明治44年、明治44年から大正初年頃、大正2年頃に編纂された「郷土誌」であり、④は昭和7年に編纂された「郷土調査」です。①②③の「郷土誌」の調査項目を比較すると①と③はほとんど

同じ項目立てになっています。この時期のその他の「郷土誌」を比較してみても、全体を「自然界」と「人文界」に分け、「自然界」は「地界」「水界」「気界」「動物」「植物」「鉱物」とし、「人文界」は「戸口」「教化」「制度」「衛生」「経済」などに編成しているのが特徴といえます。このように多くの「郷土誌」が同じ項目立てをとっていることは、県なり郡の教育会が何らかの雛形を学校側に提示していたことが考えられます。ところが④の「郷土調査」になると「郷土誌」の構成とも大きく違ってきます。「郷土の歴史」とか「郷土の自然」というように、「郷土の〇〇」という形式をとっていることが目につきます。この形式は、当時の文部省社会教育官千葉敬止が郷土調査上必要な項目として教育雑誌に掲載したものです。小学校ではこれを参考に編纂していたことがわかります。

3、「郷土誌」編纂の背景

それではこうした「郷土誌」や「郷土調査」の編纂にはどのような背景があるのでしょうか。それは戦前における郷土教育の動きと深く結び付いていると考えられます。影山清四郎氏は戦前の郷土教育の流れを大きく四つの時期に区分しています。（「郷土教育運動」『歴史公論』第8巻第10号昭和57年）それによると第1期は明治10年を中心とした直感教授にもとづく郷土教育、第2期は明治末期の義務教育延長や地方改良運動と結びついた時期、第3期は大正末から昭和初期にかけての郷土教育、第4期は1940年代の国民学校国民科に「郷土の観察」が加えられた時期であります。この時期区分に「郷土誌」及び「郷土調査」編纂の時期を当てはめると、「郷土誌」編纂の時期は郷土教育の第2期にあたり、「郷土調査」のそれは第3期にあたります。この時期の違いが、学校の郷土に対する研究・実践の成果物に微妙な相違をもたらしたといえますが、具体的な検討は後日を期したいと思います。（学芸係 大野政己）

表1 入間郡内における「郷土誌」類の一覧

書名	書式	編著者	作成年
鶴ヶ島村史談	美濃判墨書	第一鶴ヶ島尋常高等小学校教導平井清介	明治26年
大家郷土誌		大家小学校	明治42年
豊岡町誌		豊岡町	明治42年
郷土誌		勝呂尋常高等小学校	明治43年～大正初年
奥富村郷土誌		奥富小学校	明治44年5月
郷土誌		所沢尋常高等小学校	明治44年7月
水富村郷土誌		水富小学校	明治44年11月
南畑村郷土誌		南畑尋常高等小学校	明治44年12月
郷土誌		日東尋常高等小学校	明治44年
郷土誌		川越北尋常小学校	明治44年
豊岡村郷土誌	美濃判墨書	第一鶴ヶ島尋常高等小学校・第二鶴ヶ島尋常高等小学校	明治44年
鶴ヶ島村郷土地誌		文明小学校	明治44年頃
柳瀬村郷土誌		松井尋常高等小学校	明治44年頃
松井村郷土誌		吾妻尋常高等小学校	明治44年頃
吾妻村郷土誌			明治44年頃
東金子村郷土誌			明治44年頃
高萩村郷土誌		高萩尋常高等小学校	明治44年頃
山田村郷土誌		(山田尋常高等小学校)	明治44年～大正初年
福岡村郷土誌		福岡尋常高等小学校	明治45年6月
三ヶ島村郷土誌		三ヶ島尋常高等小学校	明治45年8月
郷土誌	大田尋常高等小学校	明治45年頃	
高階村郷土誌	美濃判墨書	藤間尋常小学校	大正2年頃
川越郷土誌			大正2年頃
三芳村郷土誌		三芳尋常高等小学校	大正6年
大井村郷土誌		旭学校	大正7年頃
鶴瀬村郷土誌			大正8年頃
宗岡村郷土誌		宗岡尋常高等小学校	大正9年9月
郷土調査		水谷尋常高等小学校	昭和4年
郷土調査		高麗川尋常高等小学校	昭和6年
南畑村郷土調査		南畑尋常高等小学校	昭和6年
郷土調査		福岡尋常高等小学校	昭和7年1月
吾妻村郷土調査	吾妻尋常高等小学校	昭和7年8月	
福原村郷土調査	孔版印刷	福原尋常高等小学校	昭和7年
郷土誌		所沢尋常高等小学校	昭和7年
三ヶ島村郷土調査		三ヶ島尋常高等小学校	昭和7年
郷土研究		川越第一尋常小学校	昭和7年頃
郷土調査		名細南尋常高等小学校	昭和7年頃
郷土教育資料		古谷尋常高等小学校	昭和8年5月
名細村郷土史		名細北尋常高等小学校	昭和8年9月
郷土調査		豊岡尋常高等小学校	昭和8年
飯能郷土史		飯能第一国民学校・飯能翼賛壮年団本部	昭和19年

表2 「郷土誌」類の構成

①郷土誌 (川越北尋常小学校編)	②山田村郷土誌 (山田尋常高等小学校編か)	③高階村郷土誌 (藤間尋常小学校編)	④福原村郷土調査 (福原村尋常高等小学校編)
第1編 自然界 第1章 地界 第2章 水界 第3章 気界 第4章 動物 第5章 植物 第6章 礦物	1、位置 2、地勢 付氣候 3、区画 4、沿革 5、土地 6、動物植物鉱物	第1編 自然界 第1章 地界 第2章 水界 第3章 気界 第4章 動物 第5章 植物	1、郷土の歴史 2、郷土の自然 3、土地 4、郷土の人口戸数 5、郷土の生業 6、郷土の需給品 7、郷土の金融
第2編 人文界 第1章 戸口 第2章 教化 第3章 制度 第4章 経済	7、住民 8、衛生 9、生業 10、水災 11、風俗習慣 12、教化事業 13、交通運輸 14、諸会 15、経済 16、金融機関、共同購入、貯金	第2編 人文界 第1章 戸口 第2章 教化 第3編 制度 第1章 郷土ノ沿革 第2章 官公署 第3章 風俗習慣 第4章 規約條例 (名称なし) 第1章 原始的産業 第2章 工業 第3章 職業別 第4章 住民ノ出入多キ地方 第5章 郷土ノ公経済 第6章 富ノ分配 第7章 運輸交通	8、交通運輸 9、郷土の自治 10、各種団体 11、郷土の教育 12、郷土の生活 13、郷土の衛生 14、郷土の伝説

入館者が100万人を越えました

川越市立博物館は、平成2年3月1日に開館して以来、多くの方々に来館していただいております。平成7年11月22日には、入館者が100万人に達しました。

記念すべき100万人目の入館者は、大和町にお住まいの中山久美子さんです。中山さんには、市長から100万人目の認定証と花束が贈呈され、教育長からは記念品として時の鐘模型が手渡されました。中山さんは「外観だけを見て、帰ろうと思っていましたが、博物館から出てきた人に印象



「100万人目の入館者の中山さん」

をうかがったところ、素晴らしいですよと答えが返ってきたので、入館することにしました。それが、100万人目になり、とても驚きました。今度は家族と一緒に来てみたいと思います。」と感想を述べていました。

多くの方々が来てくださるのは、来館者の皆様に良い印象を持た

皆様により感謝申し上げます
川越市立博物館百万人入館



「喜びの記念撮影」

れ、親しまれていることだと感じております。

また、当館は様々な機関からも評価をいただいております。平成5年の第35回全国カタログ・ポスター展において「初雁文化章受章者三人展」の図録が表彰されました。同年第4回公共建築賞では優秀賞をいただきました。そして、今年度の11月28日には埼玉県教育委員会より優良教育施設として表彰されました。これは、開館以来行っている幅広い博物館活動が認められたものと思われま

す。これからも、来館者の皆様に親しまれる博物館を目指し努力していきますので、よろしくお願いいたします。

歴史講演会を開催しました

11月11日、18日、25日、12月2日に「鎌倉時代の川越」というテーマで4人の先生方にご講演をいただきました。多くの受講者が参加され、好評のうちに終了しました。



◀11月11日
田代 脩先生



◀11月18日
福島正義先生



◀11月25日
小泉 功先生



▲12月2日
林 宏一先生

発行日

平成8年3月1日

発行

川越市立博物館

〒350 川越市郭町2丁目30番1号
TEL 0492-22-5399